

可シ○今回佛國へ歸航後若シ止ヲ得サル事故アリテ日本政府ノ聘ヲ辭シ再ヒ來航セサルカ如キコアルキハ派出ノ理事官へ稟議シ更ニ製鐵所起立事業ヲ負擔シ得可キ技師其人ヲ撰拔シ今日ニ至ルマテ既定ノ條款ヲ遺漏ナク引繼キ其起立上ニ於テ敢テ障碍スル所アラシム可ラス
佛國海軍士官トロートルハ橫濱製鐵所ノ首長タル可シ故ニ該所設立方案及圖面ニ據テ之ヲ完全竣成スル爲メ凡百ノ事業ヲ負荷シテ今ヨリ一ケ年半職務ヲ勉勵ス可シ其俸給ハ公使ノ裁定スル所ニ據リ年俸洋貨四千二百弗トス但シ之ヲ月數ニ割賦シテ支給ス可シ○前項設立工事ヲ起スニ當リ佛國工手ヲ傭使スルヲ許スト雖モ其人員三名其月俸ハ一名百弗ノ割合ヨリ超フルヲ得ス而シテ常ニ日本譯

官ト起居ヲ共ニシ其通譯ノ便ヲ圖ル可シ且ツ在職中ハ一ニ製鐵所ノ事務ニ服シ苟モ商賈販賣ノ事ニ關ス可カラス
○日本政府ヨリ該製鐵所需用品ノ檢査トシテ其產出地へ派出ヲ命スルキハ其命ニ從フ可シ其旅費ノ如キハ俸給ノ外別ニ支給スルモノトス而シテ其派遣地ノ開港開市場外ナルキハ必ス橫濱駐劄佛國領事へ届出ツ可シ○首長ハ職事ニ就キ若シ日本官吏ト見解ヲ異ニシ諍議ヲ生スルキハ橫濱駐劄佛國領事ノ判決ヲ請フ可シ尙ホ覆審ヲ要スルキハ公使ノ處斷ヲ取ルモノトス

二月四日在橫濱ノ栗本瀨兵衛ヨリ佛國公使ノ提出セシ製鐵所構造ノ圖案甲乙二葉ヲ江戸ノ委員へ送附ス甲圖ハ散逸シテ傳ハラス乙圖説明書原譯左ノ如シ

i o. c ハ灣 E H C B ハ岡阜 k l 共ニウエルニ——始メ大三官
ノ居宅ヲ建ツ諸棟梁ハ i ニ住居ス A M ニ番所三ヶ所取建
ツ可シ夜ハ T T ノ往來ヲ禁ス併シ道路ハ開ク可シ i ハ不
殘埋立地トス土ハ近側ノ山ヨリ取ル春秋滿潮ノ節水平ヨ
リ二尺ノ高トス此間民居十軒アリ皆取拂フヘシ且ノ山多
ク土ヲ剛ク可カラス二間ノ高ヲ殘シ留ム可シ i ノ水堰赤
線ハ石或ハ木ヲ以テスル可ナリ O モ同様ナリ併シ其内一
間ノ深ノ水ヲ存ス可シ U モ埋立スヘシ山際赤線迄土ヲ掘
取ル可シ C ノ處當時ノ修復所ナリ石炭ト火山ノ灰ヲ貯フ k l ハ棟梁
ヲ置ク場所トス i ノ赤線角ハ 端パツ舟テイヲ打建及塗師ヲ
置ク家ヲ建ルニ地形二尺高ニ土揚シ平均ス家作ハ入口窓
其外共諸色成ル丈洋人風ニ倣ヒ造ルヲ要ス下棟梁ハ臥床

六椅子十二又下職人ハ食机六臥床十二椅子十二
右ハウエルニ——今日開帆佛行留守中相違ナク取建ノ一但
日本二月ヨリ五月末迄ニ出來ノ積リ
二月委員一名ヲ横須賀ヘ派出シ日數二十日ヲ以テ江戸ヨリ
交代シ製鐵所起立事務ヲ統理セシム始木下謹吾淺野伊賀守
ヲ以テ派出員ニ充テ次テ軍艦奉行石野式部ヘ製鐵所委員ヲ
命シ淺野伊賀守ニ代ヲシム爾後屢々改選ス其派出員ノ處務
心得ヲ設ル左ノ如シ

今回起立ノ製鐵所ハ其建築工業ヲ擧ケ佛人ヘ委托スルモ
ノトス故ニ其工業ニ關シ百事佛人ヨリ提出スル一々政
府ノ裁可ヲ經ハ爲メニ事業ノ淹滯ヲ來シ竟ニ製鐵所竣工
ノ期ヲ誤リ佛國政府ヘ對シ我失鉢タルヲ免カレサルニ至

ル之ヲ以テ派出員ハ最モ事業ノ抄取ニ注意シ佛人提出アル毎ニ直ニ裁決處分ス可シ然レモ其事項ノ重大ニ涉ルカ又ハ經費ニ關スルカ或ハ不急ニ屬スルモノハ必ス政府ノ許可ヲ經テ之ヲ施行スヘシ

二月横濱製鐵所建築ノ工ヲ起ス是ヨリ先キ佛國公使ハ機關士シレンソライヲシテ幕府カ所有ノ工作機械ヲ點檢セシメ之ヲ横濱製鐵所ヘ据附ルヲ以テ適當トス是ニ於テ委員ハ速ニ該製鐵所設立ニ着手セント欲シ首長トロートル譯官北村元四郎後名村泰藏ト改稱ス及屬僚杉浦清介後赤城ト改稱ス以下ヲシテシンソライ等ト協議セシメ前記起立原案第二節ニ據リテ其計畫ヲ定メ横濱本村ニ於テ先ツ其敷地ノ土工ヲ竣ヘ此ニ至テ其建築ニ着手ス

相州横須賀并横濱表に製鐵所御取建し付器械製作方御雇等之義ニ付相同候書付

- 松平對馬守
- 小栗上野介
- 木下謹吾
- 石野式部
- 栗本瀬兵衛
- 小野友五郎
- 淺野伊賀守

贈新組

善次郎

丑歳廿六

小普請組

曲淵安藝守組
平次郎仲

篠田平吉

丑歳廿九

持筒之頭

曾我主水組同心
若山三十郎厄介伯父

善積鑑藏

丑歳三十一

黒鯨頭

柳田勝太郎組
一郎三男

小倉久藏

丑歳廿三

同

祐三郎弟

加藤富藏

丑歳十八

持筒之頭

大久保隼人組同心
作事方勘定役出役
大久保正助厄介弟

井上源次

丑歳廿一

岩城左京大夫家來
百助弟

鵜殿與五郎

丑歲廿五

右者今般相州横須賀并横濱表に製鐵所御取建相成候ニ付
追而者同所附職役之者并右ニ屬し居付候職人等之もの
不
被仰付候而者相成間敷右者追く取調可申上候得共差向候
處先般亞國より御取寄相成候器械類横濱表に御取建相成
直ニ取掛り候付而者一日雇之人足計リニ而者日く出面相
替り佛人より深切ニ相傳へ候而も其時限り之義ニ付心ニ
留不申姿ニ而一時之御用辨者先ッ差支も無之候得共追而
之處居付働方いゝ候者無之候而者差支候ニ付鍛冶職其

外共相當之賃銀を以人數相定名前取極御用中雇揚切りニ
仕候方哉と奉存候得共右ニ而者多人數之義御出方多ニも
可相成製鐵器械備具仕候上ハ附屬之職人出來候積差向候
處ハ日く之雇揚方ニ仕置右人足を追廻し重立働方等仕候
もの雇揚切ニ可仕哉と奉存候得共重立候職人之義ハ就中
銘く之才覺ニ而多分之利潤を得候者ニ付是亦充分ニ賃銀
渡し遣し不申候而者引留候義ハ不相成候ニ付勘辨仕候處
諸組同心其外身分卑き者之部屋住次三男厄介等之内活計
之爲め鍊鐵之業等内實内職等仕居候ものも可有之右を引
揚相當之御手當被下製鐵所御用之方へ御遣ひ方いゝ候
方哉と奉存候ニ付取調候處書面名前之者共者鍊鐵等之業
相應ニ取廻し候ものニ御座候間御軍艦操練所器械製作方

御雇之名義ニ被仰付候様仕度奉存候尤横須賀横濱表に相詰候節者一日壹人銀拾四匁宛且職人に打交り働方仕候義ニ付衣服等忽汚レ切レ損一右入費も不少義ニ付筒袖之胴服輕棧留等相渡一候様可仕奉存候尤右御手當胴服類共御出方之義者自余役く之御手當とも違ひ候間兩様共製鐵所御取建御用御入金之内より相渡一候積御座候右ふて可然義ニ候ハ、早く被仰渡候様仕度奉存候私共熟談仕此段奉伺候以上

丑二月

下ケ札

本文御手當銀之義者内職等致一居一日壹人ニ付是

迄銀拾四匁ツ、手間賃銀請取暮一方仕居候ものも有之候義ニ而御軍艦鍛冶職等之義御定賃銀一日銀七匁八分ツ、之處右者朝五ッ時頃より夕七時迄之賃銀ニ而大早出大居殘等仕候得ハ右賃銀之倍增相渡一候義ニ有之其外市中諸職人等雇揚候節者大概前書之振合ニ有之今般製鐵所御用之義者佛人に御托一相成彼方ニ而者格別勉強拂曉より相始品ニ寄夜陰迄働方指揮致一候義ニ付右之手ニ附働方仕候義故銀拾四匁ツ、被下候而も相當之義と奉存候ニ付本文之通申上候

覺

書面鵜殿與五郎之外何とも同之通御軍艦操練所器械製作
方御雇ニ可被申渡候尤頭々々者其方共より可被達候且横
須賀并横濱表に相詰候節者爲御手當一日銀七匁ッ、早出
居残りゝゝ候節者一日銀拾四匁被下候間製鐵所御取建
御入用金之内より御出方ニ取計可被申候衣類之義ハ難被
及御沙汰候間可被得其意候事

三月十二日委員ハ曩ニ横須賀製鐵所構造圖案ヲ佛公使ヨリ
得テ爾來其構造計畫ヲ詳議シ此ニ至テ横須賀村ニ於テ三賀
保白仙内浦ノ三灣ニ亘ル地坪七万四千三百五十九坪強ノ地
ヲ以テ製鐵所構造ノ敷地ニ充ツヘキモノトス

四月二十五日幕府ハ外國奉行柴田日向守ヘ佛國使聘ヲ命シ

委任狀ヲ授附ス是前項起立原案第八節ニ掲クル佛國派遣ノ
日本理事官ニ充ルモノナリ且ツ兼テ日向守ヘ英國使聘ヲモ
命スルニ就キ老中水野和泉守阿部豐後守ハ在横濱ノ佛國公
使ロセス及英國總領事代理チャルレスウインチュストルヘ
之ヲ通牒シ各々其本國政府ヘ報告セシム而シテ外國奉行ノ
屬僚水品樂太郎富田達藏小花作之助譯官福地源一郎鹽田三
郎及定役一員ヘ日向守ノ隨行ヲ命ス其日向守ヘ授附スル佛
國使節ノ委任狀原文左ノ如シ
佛蘭西國都府ニ於テ談判之義其方ヘ令委任全權使節ヲ命
スルモノナリ

慶應元丑年四月 朱印

四月是ヨリ先キ船廠ヲ府下石川島へ起サントシ其工作機械
ノ注文ト該工業傳習ヲ受ル爲メ軍艦頭取肥田濱五郎及軍艦
組二名ヲ和蘭國へ派遣セリ然ルニ軍艦奉行ハ今回西式工場
ヲ横須賀へ設ルヲ以テ別ニ海外ニ於テ傳習ヲ受ルヲ要セサ
ルモノトシ經伺之上正月廿九日命令ヲ傳へ濱五郎一行ヲシ
テ該機械ノ注文ヲ了へハ速ニ歸朝セシム而シテ今者偶マ理
事官ヲ佛國へ派遣スル命アルニ會シ軍艦奉行ハ更ニ覆議シ
テ以爲ヲク濱五郎一行ノ和蘭ニ在テ機械工藝ニ從事スルヤ
日アリ故ニ之ヲシテ佛國ニ至リ理事官ニ附屬シ其事務ヲ輔
翼セシメハ大ニ裨益スル所アラント即チ連署建言シ本月廿
五日再ヒ其命令ヲ濱五郎へ傳達セリ
四月 幕府ハ曩ニ佐嘉藩主鍋島齊正ノ献呈セシ工作機械ヲ

受ケ長崎奉行所へ格護セリ今回横須賀製鐵所ノ起立ニ當リ
之ヲ該製鐵所へ据附ク可キモノトス是ニ於テ委員ハ軍艦奉
行へ照會シ米國ヨリ購入帆船ノ試航ニ托シ之ヲ長崎ヨリ輸
送セシメ本月廿六日横濱へ達スルヲ得タリ一本ニハ是ヨリ
先キ該機械ノ一
半ヲ輸送シテ既ニ横濱石炭庫ニ格護セリ故ニ佛國公使ハジ
ンソライヲシテ點檢セシメ之ヲ横濱製鐵所へ据附シト云フ
爾後軍艦奉行ヨリ其船積ミ費用ハ金六百五兩強洋貨二百七
十弗ヲ要セシ通報ニ據リ其償却方ヲ上申シ而シテ該機械ノ
陸上ケ及其格納場假設並ニ防鏽手入ニ係ル經費總額ヲ金三
千兩ト豫算シ五月八日其下附ヲ上請シ閏五月八日裁可ヲ得
タリ然ルニ其陸揚ケノ如キハ暫クモ猶豫シ難キヲ以テ該下
附金裁可以前即チ五月九日具申シテ之ヲ實行セリ

五月十二日佛國公使ロセスハ日本理事官ノ歐洲行心得十項ヲ掲記シ之ヲ進呈ス其項目ノ抄譯左ノ如シ

第一日本理事官ハ横濱ヲ發シアレキサンドリヘ到ルヤ全所駐在ノ佛國領事ヘ横濱ニ於テ公使カ寄托セシ書翰ヲ轉致ス可シ然ルキハ該領事ヨリウエルニ及フロリヘラルトヘ豫シメ理事官カ馬塞里著船ノ日ヲ報知スヘシ

第二日本理事官ノ馬塞里ヘ到ルヤ百事ウエルニ及フロリヘラルドノ周旋スル所ニ從フ可シ土命船廠ノ巡視ヨリ各所ノ訪問ヲ經テ巴里ヘ到ルマテ該兩氏ハ總テ其嚮導ヲ爲ス可シ

第三日本理事官ノ巴里ヘ到ルヤウエルニ及フロリヘラ

ルドノ引會ヲ以テ外務ミニストルヘ面晤シ老中ノ書翰ヲ交付スヘシ次テ海軍ミニストル陸軍ミニストル及土木兼農務ミニストルヘ面會ス可シ

第四日本理事官ハ使命ノ件ヤヲ談判スル爲メ再ヒ外務ミニストルヘ面會スヘシ

以上各項ヲ了ヘハ英國倫敦ヘ到リ其使命ヲ達ス可シ
第五日本理事官ノ倫敦ヨリ再ヒ巴理ヘ到ルヤウエルニト協議シ專ラ使命中ノ主要ナル製鐵所起立事務ヲ區處ス可シ

第六日本理事官ハウエルニ及フロリヘラルトヲ信用シテ百事ヲ委任ス可シロセスカ此ノ二人ヲ視ルヲ猶ホロセスカ自己ヲ視ル如シ以テ其信任ス可キヲ了知セラル

可シ

第七日本理事官ハ其使命ヲ了ヘ將サニ歸朝セントスル際
外務ミニストルヘ請フテ國帝第三世拿破崙陛下ヘ拜謁
ス可シロセス豫メ其裁可アラシマテ照會ス可シ

第八日本理事官ハ前項ノ拜謁ヲ了ヘハウエルニ一ヲ率ヒ
速ニ歸朝ス可シ

第九日本理事官ハフロリヘラルトヲシテ佛國ニ於テ日本
政府ノ支拂フ可キ貨幣ヲ取扱ハシム可シ故ニ其歸朝ニ
際シ理事官一行ニ係ル費用ヨリ購入機械ノ代價運賃及
雇入佛人ノ給料旅費ニ至ルマテ總テ出納ニ屬スル諸件
ヲ製定シテ之ニ委托ス可シ而シテ其製定上必ス遺算ア
ル可ラス

第十日本理事官ハ前各項ニ記載スル事件ノ外尙ホ承知セ
ント欲スルヲアラハロセスハ幾回モ之ヲ告知ス可シ然
リト雖モロセスハ既ニ其要領ヲ説了セシト認ルヲ以テ
筆ヲ茲ニ絶ツ

五月廿日はヨリ先キ委員ハ老中ノ命ヲ承ケ前記製鐵所構造
ノ圖案ニ就キ其經費ノ豫算額ヲ調査スルニ工場其他家屋ノ
建坪ハ合計七千八百五十坪強ニシテ之ヲ文久二年横濱へ建
設セシ英國領事館ノ構造ニ比較シ尙ホ現今物價ノ騰貴セル
ヲ以テ之ニ其騰貴セル分合ヲ加算スルキハ一坪金二十八兩
三步強ニ當リ總計費金二十二万六千兩ヲ要スルモノトス然
レモ我國未タ歐州建築法ノ傳ハラサルヲ以テ其工事ノ仕様

ヲ悉シ難シ故ニ工場其他家屋ノ建設ハウエルニ――ノ再航ヲ
俟テ之ヲ議定ス可キモノトシ并ニ該圖案ニ掲クル大小船渠
ノ位置ヲ實測スルニ水底稍淺ク而シテ泥滓深キ八九尺果シ
テ其地位ニ適スルヤ否ヲ知ラス故ニ船渠築造モ亦ウエルニ
――ノ再航ヲ俟テ議定スヘキモノトス是ニ因テ以上二項ノ經
費調査ヲ除却シ今日ニ在テ其調査シ得ラル可キモノハ製鐵
所設立ノ敷地ニ係ル土工ニシテ即チ内浦白仙ニ跨ル山地建
坪十一万坪強ヲ伐取リ其土石ヲ以テ該内浦白仙及三賀保ノ
三灣ヲ埋立并ニ沿岸卑濕ノ畑地ヘ置土シ平均滿潮面ヲ出ル
一三尺ノ地ト爲スニ在リ然ルハ其埋立及地揚ケニ要スル
土石ハ立坪四万六千六百八十坪ニシテ残り立坪六万三千五
百坪ノ分ハ横須賀灣外ヘ棄却ス可キモノトス即チ山地伐取

三灣埋立等ヨリ埋地沿岸地杭打立石垣築造ニ至ルマテ我國
從來慣用ノ土木法ニ據テ落成セシムルハ棧取木材尺締七
千本ト經費金十二万八千兩ヲ要ス可キ豫算タリ是ニ於テ本
日之ヲ老中ヘ具申シ併テ該豫算額ヲ以テ土工ニ着手センコ
トヲ上請ス閏五月二十八日老中之ヲ裁可シ且ツ指令スルニ
製鐵所設立ハ我國創業ニ係リ經費巨額ヲ要スルヲ以テ其仕
様明細表ヲ勘定所ヘ提出シ務テ費用節減ニ注意スヘシト
五月委員小栗上野介以下連署シテ上書ス其略ニ曰ク此時製鐵所委員タルモノ總計八名即チ小栗上野介山口駿河守柴田日向守木下大内記石野筑前守栗本瀬兵衛増田作右衛門淺野伊賀守
今ハ製鐵所起立ニ當リ百事ヲ舉ケテ佛人ヘ委托スルヲ以
テ惟フニ工場落成ノ後チ容易ク軍艦ヲ製造シ得ヘシ就テ

該製造上最モ闕ク可カラサルモノハ艦材タリ故ニ各官林ニ於テ適應ノ木材ヲ伐採シ及人民私林ノ良材ヲ購買シ共ニ便宜ノ地ヘ圍場ヲ設ケテ之ヲ貯藏ス可シ然カスル時ハ常ニ四五隻ノ製造ニ着手スルモ敢テ其需用ヲ闕カサル可シ然レモ伐採ノ後直ニ生材ヲ使用スルキハ究メテ腐朽シ易キヲ以テ必ス二三年間圍場ヘ儲藏シ置キ其木脂ノ脱去スルヲ俟テ初メテ使用スルヲ得ヘシ之ヲ以テ今日ニ當リ速ニ伐採儲藏ニ係ル諸件ニ着手セサル可カラス且夫數百年ヲ經過セシ巨材ヲ採テ二三十年間ニ腐朽ス可キ艦材ニ使用スルキハ積年ノ後チ遂ニ邦内ハ巨材ヲ伐採シ盡スノ理ナリ故ニ今日ニ當リ併テ森林保育ノ方法ヲ設ケサル可カラス過般横濱製鐵所首長トロートルヨリ左ニ譯述セル

艦材意見書ヲ木下大内記ヘ差出セリ其意見ハ下官等ノ見ル所ニ同シ因テ我邦產出ノ巨材數種ヲ附シテトロートルニ點檢セシメ其艦材ニ適應スト爲スモノハ尙ホ他ノ在留佛人ノ造船士ニ再閱セシメ以テフレガット及コルフエツト形其他各種軍艦ニ適應スル曲直材ノ形狀寸尺ヲ調出セシメ其調出セル雛形ニ據テ官林ニ在ルモノハ之ヲ伐出シ私林ニアルモノハ之ヲ購入シ今ヨリ艦材蒐集ニ着手センヲ勘定奉行ヘ下達セラル可シ且ツ官林ハ該奉行ノ所管タルヲ以テ之ヲシテ苗木植繼ヨリ培養保育ニ至ルマテ總テ規則ヲ設ケテ實行セシメ其方法稍々端緒ニ就クヲ俟テ之ヲ各藩及人民所有ノ森林ヘ及ホシ而シテ其培養セル良材ハ政府ノ購入ス可キモノト確定セラレ以テ之ヲ邦内ヘ

布達セラル可シ然ル後チ官吏ヲ派出シテ森林保育ノ一ヲ
勸奨セハ我海國關ク可カヲサル多數ノ軍艦ヲ製出スルニ
於テ永世艦材缺耗ノ憂ナカル可シ茲ニ下官等ノ鄙見ヲ具
申シ謹テ取捨ヲ仰ク

トロートルノ艦材意見書原譯ヲ摘出スル左ノ如シ

在江戸ノ軍艦奉行木下君臺下ヘ

日本國ハ素ト海軍ニ因テ振起ス可キ地勢タリ故ニ政府ハ
今ヨリ全國森林ヲ點檢シテ更ニ規則ヲ設ケ常ニ巨額ノ艦
材ヲ蓄藏スルニ注意スルヲ以テ緊要トス○官林ヘハ務メ
テ赤松クシ槻楠ノ如キ巨材ト爲ル可キモノヲ植附ク可シ
其種樹法タルヤ何レモ距離二メートルヲ隔ツ可シ而シテ

漸次其成育ニ隨ヒ下枝ヲ伐拂ヒ培養果シテ其宜ヲ得ハ他
年大小ノ材料繁殖シ政府ノ需用ヲ缺クナカル可シ○私
林ヘハ官吏ヲ派遣シテ良材ヲ選ハシメ之ヲ政府ノ需用材
トシ所有主ヲシテ保管成育セシム可シ艦材ハ總テ伐採ヨ
リ數年ヲ經過シ乾燥セサレハ其用ニ適セス故ニ軍艦製造
及修理ノ程度ヲ計リ速ニ其儲藏ニ着手セサル可ラス而シ
テ木材儲藏ノ法タルヤ普ク世人ノ知ル如ク潮水淡水更互
ノ地ヘ圍場ヲ設ケテ浸置ク可キモノタリ然スル時ハ數十
年ヲ經過スルモ敢テ其材質ヲ變更セス且ツ此法タルヤ火
災ヲ免カル、ノ便アリ即チ江戸ノ如キハ隅田川ノ河口ヲ
以テ最モ之ニ適スルノ地トス宜シク此地ヘ圍場ヲ設ケ可
シ○日本產出ノボワデサツブハ良質タリ故ニ多額ノ儲藏

ヲ爲ス可シ而シテ赤松及松材檜材ハ艦船上部ノ諸具帆桁
又ハ下部ノ板具ニ用ヒ樫及栗材ハ外部ノ板具又ハ内部ノ
造作ニ用ヒ槻材ハ棟梁短檣龍骨材ニ用ヒ楠材ハ樫及槻材
ノ用ヲ兼ネ赤樫及椎材ハ大砲車臺轉輪盤其他壓力ヲ受ル
モノニ用フヘシ故ニ是等要用ノ木材ハ最も多數ニ儲藏ス
ルヲ要ス○木材良否ノ監識ハ多年巨額ノ材料ヲ檢閲シ
テ經驗上ヨリ之ヲ會得ス可キモノトス

千八百六十五年三月廿三日

エルトロートル

海軍歴史卷之二十一

海軍歴史卷之二十二

横濱及横須賀製鐵所創設之下

目錄

- 横濱製鐵所興利ノ意見
- 寄場人足ヲ横須賀ノ工事ニ派遣ス
- 佛人フロリヘラルトニ我國事務ノ取扱ヲ委托ス
- 横濱製造局ノ區別
- 肥田濱五郎荷蘭ニ於テ器械ヲ購入ス
- 機械製造ノ條約書
- 技師俸給姓名雇入ノ月日
- 佛公使口授數條

肥田濱五郎氏ノ建議

横濱製鐵所建築ノ規約

ウエルニ―氏物産使用ノ意見

京極主膳正ノ回答

栗本氏ノ筆記

海軍歴史卷之二十二

横濱及横須賀製鐵所創設之下

閏五月三日理事官柴田日向守ハ屬僚六名ヲ率ヒ江戸ヲ發シ
横濱ニ到リ五日英國郵船ネポール號ヘ搭シ發船諸港ヲ經テ
屢々轉乘シ六月廿六日蘇士ヘ着船即日汽車ニ上リ二十七日
アレキサンドリヤヘ到着シ前記理事官歐洲行心得第一項ニ
據リ此地駐在ノ佛國領事ヘ引會ヒ即日郵船ナヤンザ號ヘ搭
シ發船七月六日馬塞里ヘ着船スウエルニ―ハ曩ニ在アレキ
サンドリヤ領事ノ電報ヲ得テ茲ニ之ヲ迎ヘ九日嚮導シテ土
倫船廠ニ到リ日々其工場ヲ巡視シ規模ノ概畧ヲ説明ス是前

海軍歴史資料 卷之三十一
記起立原案第八節ニ掲クル我製鐵所創立ノ參考ニ供スルカ
爲メナリ十三日馬塞里ヘ復歸シ十七日巴理ニ入ル

横濱表製鐵所御仕法筋之儀ニ付相伺候書付

横濱表製鐵所之義追々御普請出來寄御落成迄尙兩三ヶ月程も相懸可申候得共豫め御仕法立置不申御普請成功器械製造ニ取掛り候節ニ至り勘辨之上相伺候様ニ而者徒ニ時日を送り手順齟齬いふ候義も有之不都合ニ御座候間右御仕法筋唯今之内取極置申度元來西洋各國おゐて器物製作之義人工ニ而者多分之時日と費し諸入費も相掛候上精密之作造不行屈殊ニ人力ニ限ある義ニ而船艦砲礮等巨大堅牢之器械製造難出來候ニ付蒸氣機關發明以來更ニ人力と不借右之力を以て一切之器械製造いふ候ニ付文武諸

器物者勿論日用之雜具ニ至る迄精巧を不極品迄者無之實ニ製鐵所之義富國之要具不可欠品と奉存候右故方今世界ニ富強之聞ヘ御座候英佛等各國於而者都鄙と不論數多取建置候趣も有之御國ニ而も今般御取建相成候社幸全國之御便利相成永續仕候様致度依之私共一同商議勘辨仕候處先年長崎表々和蘭人御傭相成御取建御座候製鐵所之義莫大之御入用相掛り候得共いふ御益相見不申矢張年々御足し金有之趣横濱表製鐵所之義右と同様御失費而已相掛候而者折角御取建之甲斐も不相立不都合申迄も無之西洋ニ而者之を以て國を富し御國於而者御損失相成候と之理も有之間敷永續之御仕法取調左ニ申上候義ニ御座候一体横濱表製鐵所之義諸器械何品と限り候義無御座馬

力ニ應ヘ製作出來候ヘ共同所ヘ御備ヒ相成候佛人口ト
ルト申者見込ニ而も初發試之ぬ川筋并港中ふて相用候
小形蒸氣船打建候積ニ有之右出來方ニ寄尙追々製造可仕
右を悉く御備置よてハ御益ニ不相成勿論御入用相當候而
已ニ而御失費取戻方之御仕法不相立詰り永續ニ拘り候
間右小形蒸氣船製造相成候上者御府内廻船問屋者勿論其
他町人百姓等望之者々者願出次第打建御入用并御益金と
見込相當之直段ヲ以御拂下ケ相成江戸表より横濱浦賀等
々之諸荷物并上下野州等川筋運送總房其外之渡海船等都
而右蒸氣船と相用候義御差許相成鐵砲洲築地邊永代橋最
寄等御取締之爲メ便宜之地所兩三ヶ所も相撰改會所取建
大船出入之都度荷物積出元より積届ヶ先之送狀等篤

と改方ぬ運送船者積荷之高渡海船ハ人數之乗組多少
ニ應ヘ稅額差定取立候得者御取締も相立御益も少る間敷
且内海里程之義何方より何方に罷越候而も僅ニ十里内外
之海路普通之帆前運送船ニ而者日和惡敷節者數日押留ら
る商估とも利潤之機會を失ヘ候義毎々有之趣蒸氣船ニ而
者烈風怒濤者格別小風雨ニ而者右様之懸念無之ハ勿論破
壞ヘ易き木工船と違ひ荷物之損傷少く日を期ヘ時を約ヘ
て出入往返自在ニ出來ぬ候ヘ者何程急劇之用向ニ而
も無遲滯相辨ぬとヘ租稅差出ヘ候而も下ニ而者便利
之義相辨ヘ如何計喜悅可仕も難計左候節者大坂兵庫等商
估輻湊荷物之搬運盛之場所追々右便利之趣聞傳ヘ買入方
之儀願出候様相成可申其節者御府内等之振合を以改會所

可然地に補理運上取立候得者莫大之御益御座候而已あら
ば全國人民之便利と相成候間何も江戸表より御開諸方に
押及一候様仕度將又御國ニ而者從來銅製之器物重ニ御
座候得共銅質之義鐵性と違ひ柔軟ニ而器物ニ製一候ても
保方不宜鐵器之堅硬且安直ニ者及不申候得共人工ニ而者
製作不行屆右製鐵所於而蒸氣船之外武器類者勿論農具又
ハ釜銅壺等日用之雜具ニ至迄追々製作ハ多御拂下ケ相
成候得ハ是亦御利益不少候間製鐵所御取建諸御入用忽仕
埋方出來尙御益金を以同所者勿論傳習場等之諸御入用御
賄相成候得者金庫之御出方ニ一切不相成而已あらす漸々
御益増殖可仕と奉存候間右之義御採用御座候様仕度尤一
利一弊之義も御座候ハ前書申上候趣可然も被思召候ハ

、其邊取締筋之義者勿論蒸氣船出入改方并製作品者御拂
下ケ之手續等尙巨細取調相伺候様可仕と奉存候依之此段
奉伺候以上

丑閏五月

製鐵所掛

閏五月十五日寄場人足二百名及其看守ノ官吏ヲ併テ之ヲ寄
場奉行ヨリ勘定奉行ヘ引渡シ以テ横須賀ヘ派遣シ前記製鐵
所敷地ニ係ル海岸埋立工事ヲ分擔セシメント欲シ該兩奉行
ヘ下達シ十八日心得トシテ我委員ヘモ下達セリ

七月三十日理事官柴田日向守ハ巴里ニ在テ外務ミニストル
ルワインデリユイスヘ面晤シ前記我政府ノ使命ヲ傳ヘ即チ
江戸發途ノ際老中ノ附與セシ閏五月二日記ノ書簡ヲ授付ス

其略ニ曰ク

方今日本政府ハ歐洲制式ニ模シテ船廠ヲ起立シ及貴國陸軍ニ倣フテ兵制ヲ改革セント欲ス因テ之ヲ我横濱駐劄ノ貴國全權公使レオンロセス氏ヘ謀ルニ氏ハ我國情ヲ熟察シテ其周旋ヲ諾シ既ニ貴國政府ヘ開申セラレシヲ以テ惟フニ閣下モ之ヲ領知セラル可シ故ニ今復々茲ニ贅言スルヲ須ヒス幸ニ閣下ノ幹旋ニ籍リ今回派遣ノ我理事官柴田日向守ノ稟請スル諸件ヲシテ盡ク貴國皇帝陛下ノ許可ヲ得テ以テ我カ政府ノ企圖ヲ満足セシムルニ至ヲハ惟リ我國ノ幸福ノミナラス之ニ因テ益々兩國ノ交誼ヲ厚フスルハ深ク信シテ疑ヲ容レサル所ナリ且ツ貴國紳士フロリヘラルト氏ニ我國ノ事務取扱方ヲ委任セント欲ス是亦日向

守ヨリ稟議ス可シ請フ閣下ノ承認アラント

因テ日向守ハ該書簡ノ旨意ヲ敷演シ且ツ曰フ願クハ閣下ノ注意ニ籍リ我國要求ノ諸件即チ船廠起立兵制改革并ニ海軍技師陸軍士官雇入等ノ談判ヲシテ支障ナク之ヲ完了シ得セシメンコヲ企望ストリユイス異議ナク之ヲ領諾シ曰ク事務ヲ區處スル各々其主任アリ願クハ臺下自カラ船廠ニ係ル事項ヲ海軍ミニストルヘ兵制ニ係ル事項ヲ陸軍ミニストルヘ引會ヒ以テ貴國政府ノ企圖ヲ満足セシメラル可シ其事由ノ如キハリユイス具サニ之ヲ兩ミニストルヘ通牒セント是ニ於テ日向守ハ八月二日海軍ミニストルヘ六日陸軍ミニストルヘ面晤該事項ヲ引會ヒ各々其承諾ヲ得タリ因テ日向守ハ七日手書ヲ發シテ之ヲ具申シ十月十二日以テ江戸ヘ達スル

ヲ得タリ

八月理事官柴田日向守ハ前項外務海軍兩ミニストルヘ面議
ノ際ウエルニ――雇入ノ領諾ヲ得テ即チ本年七月十二日本日
曆千八百六十五年九月一日ニシテウエルニカ日向守ヲ以
ヲ馬塞里ニ迎ヘ之ヲ嚮導シテ土命船廠巡視ノ日ニ係ルヲ以
テ雇入ノ期日ト爲シ其條約書ヘ捺印セリ是前記製鐵所起立
原案第八節ニ據ルモノナリ是ニ於テ日向守ハウエルニ――ヲ
シテ全上原案第四節第八節ニ據テ副アンジエニヨール官以
下諸工ヲ選用セシム此ノ時ニ當リ亞西亞地方ニ於テ未タ西
式船廠ノ設ケアラス適々我國其創立ノ舉アリト聞キ巴理府
内外各地ノ技手工夫ハ爭テ日向守ノ旅館ニ就キ其聲價ヲ張
テ自己ノ雇入ヲ請ヒ而シテ各製造者モ亦機械効用書ヲ携帶
シ來テ其購入ヲ請フモノ踵ヲ接スルニ至ル然レモ此等ハ果

シテ信憑ス可カラサルヲ以テウエルニ――ハ一ニ之ヲ謝絶シ
副アンジエニヨール官以下雇入ノ如キハ佛國政府直轄工場
ニ從事シ經驗アルモノヨリ選抜シ艦船ニ機械ニ及土木ニ諸
職各々其人ヲ得テ遂ニ我製鐵所創立ノ功ヲ全フセント欲シ
最モ力ヲ茲ニ用フ初メ日向守ノ佛國ヘ到ルヤ先ツウエルニ
――ノ所爲ヲ注視スルニ其壯年ニシテ世故ニ熟セス抑モ一個
ノ書生タルヲ免カレサルカ如シ爾來熟々諸件ノ取扱ヲ視ル
ニ頗ル懇切着實ニシテ今回技手ヲ選用スルニ至リ舉措幾シ
ト遺算ナク果シテ公使ロセスノ薦擧其人ヲ得我製鐵所ニ首
長タルニ負カサル可キヲ期シ本月八日其狀ヲ在江戸ノ委員
ヘ報告セリ

八月初メ紫田日向守ノ巴里ヘ到ルヤフロリヘヲルトノ人ト